日本自動車工業会 広報誌

jamagazine

Japan Automobile Manufacturers Association

ISSN 0911-7113 自動車工業
JAMAGAZINE 2023-24年冬号
2023年12月27日発行(季刊発行)

冬

JAMA Vol.57-58
WINTER 2023-24

111万人が来場！

ジャパンモビリティショー閉幕

自工会記者会見

1月からの新体制を発表　新会長に片山正則氏

EVを正しく理解し、冬のドライブを快適に！

jamagazine 冬
JAMA
Vol.57-58
WINTER
2023-24

1

2

3

4

1 JMSの「Tokyo Future Tour」で未来の東京の街を表すイマーシブシアター
2 4年ぶりとなるリアルでの記者会見で2024年1月からの新体制を発表
3 BICライブラリ内の閲覧室
4 WRCの最終戦に国内外のラリーファンが熱狂

JAMAGAZINEは完全電子化へ

いつも「JAMAGAZINE」をご愛読いただき誠にありがとうございます。

2022年4月より電子版、季刊誌のハイブリッドで発行しておりましたが、この度、紙資源の削減による環境保全のため、2024年3月末発行予定の春号をもって電子版に移行いたします。なお、従来のJAMA BLOGの掲載も継続し、更なる連携を図ってまいります。

電子化によるタイムリーかつ柔軟な誌面構成での発信に是非ご期待ください。

JAMAGAZINE電子版
https://www.jama.or.jp/library/jamagazine/index.html

JAMAブログ
https://blog.jama.or.jp/

CONTENTS

03 第8回全国軽トラ市inはままつが開催！
04 岸田首相、ジャパンモビリティショーを訪問
05 財界をあげてジャパンモビリティショーを盛り上げ
第3回「経団連モビリティ委員会」を開催
06 自工会記者会見
1月からの新体制を発表
新会長に片山正則氏
10 111万人が来場！
ジャパンモビリティショー閉幕
14 BICライブラリに「くるまコレクション」が開設
18 ラリージャパン2023 トヨタが表彰台を独占
20 自動車技術会が「自動運転AIチャレンジ」を開催
22 「バステクin 首都圏」がさいたま市で開催
安全・快適性をアピール
24 クルマと一緒に楽しめる
自動車メーカーのカフェ&レストラン
26 EVを正しく理解し、冬のドライブを快適に！
29 2023第7回 小学生 「クルマのある風景」フォトコンテスト
応募総数5,672点から最優秀賞5点を選出
30 編集後記 「18年の歳月を経て…」
31 積雪路・凍結路を走るならノーマルタイヤNO

第8回 全国軽トラ市 inはままつが開催！

▲全国から軽トラや軽バンが集結

「第８回全国軽トラ市inはままつ」が12月３日に静岡県浜松市で開催されました。全国から軽トラックや軽バンなどが集結し、地元・浜松市の農産物や全国各地の特産品などが販売されました。前日には自工会副会長で軽自動車委員会委員長の鈴木俊宏（スズキ社長）と、軽自動車委員会委員の武田裕介（ダイハツ工業取締役）も参加するシンポジウム「全国軽トラ市サミット」を開催し、まちづくりと軽トラ市の関係などについて意見を交わしました。

▼出店者と話して買い物ができるのが軽トラ市の魅力

全国軽トラ市は、第１回が2014年、岩手県雫石町で開催されました。これまでに、愛知県新城市、宮崎県川南町、静岡県磐田市、同掛川市、栃木県宇都宮市、長野県長野市で行われ、浜松市での開催は今回が初めてです。地域単位での軽トラ市は、まちの活性化を目的に2005年に雫石町で行われたのが始まりです。今では全国100以上の自治体で行われており、まちづくりの取り組みの一つとして注目されています。

12月2日には、「全国軽トラ市サミット」と題した浜松商工会議所主催のシンポジウムが開催され、全国各地の軽トラ市主催団体が一堂に会し、自工会の軽自動車委員会も参加しました。登壇者からは、「軽トラ市が季節の風物詩になっている」（軽トラはまつ出世市の河合正志実行委員長）、「継続して参加してくれている商店は、積極的に投資して元気を取り戻している」（しんしろ軽トラ市 のんほいルロットの森一洋スタッフリーダー）などの意見が出されました。

シンポジウムに参加した自工会軽自動車委員会委員長の鈴木は、「軽トラ市からまちづくりを考えてほしい。移動できる軽トラックをうまく活用し、まちを設計してもらえればと思う」と述べました。また軽自動車委員会委員の武田は、「軽は地方にとって、まさにインフラ。ユーザーの生活を支えたり、社会貢献するなどして恩返ししたい」と話しました。

3日に開催された全国軽トラ市は、開始時刻の午前10時30分には会場が多くの人で埋め尽くされるほどの盛況ぶりでした。開始からわずか1時間で売り切れとなった店舗もあったほどです。

軽トラ市終了後、鈴木は「（一般的な）市場に比べ、野菜を安く買えるし、対面で買い物する楽しみがある」と、その魅力を語りました。今後はオンラインを活用し、「同日に開催している軽トラ市同士を結ぶことも、『全国軽トラ市』と言えるのではないか」などと話し、軽トラ市をさらに広げていきたいという考えを示しました。

自工会「全国軽トラ市inはまつ」でお手伝い

▼自工会軽自動車委員会委員長の鈴木と委員の武田が出店者らにあいさつ回り

▼シンポジウムには鈴木（写真右から2人目）と武田（写真右）も参加

岸田首相、ジャパンモビリティショーを訪問

10月26日、岸田文雄首相がジャパンモビリティショーを訪れ、主催者展示「トーキョーフューチャーツアー」や「スタートアップフューチャーファクトリー」を視察されました。視察の後、首相は経団連モビリティ委員会の十倉雅和委員長、豊田章男委員長、有馬浩二委員長らと会談。自動車産業の枠組みをこえたモビリティ産業が未来の日本経済の牽引役となることへの期待を表明されました。

より詳細な内容は
jama blogでお読みになれます
こちらからどうぞ！

△岸田文雄 内閣総理大臣

△モビリティ委員会 十倉雅和 委員長
（経団連会長・住友化学会長）

△モビリティ委員会 豊田章男 委員長
（自工会会長・トヨタ自動車会長）

財界をあげてジャパンモビリティショーを盛り上げ

第3回「経団連モビリティ委員会」を開催

10月5日、経団連「モビリティ委員会」（十倉雅和委員長、豊田章男委員長、有馬浩二委員長）が開催されました。これはモビリティ産業の国際競争力の強化を通じ日本経済全体の成長を目指すもので昨年9月、今年2月に続き3回目となります。今回は委員会企業からも数多く出展・参加が予定されている、間近に迫った「ジャパンモビリティショー」（10月26日開幕、一般公開10月28日～）について、各社から「日本発のモビリティ」を発信していく決意をはじめ、経済産業省製造産業局長をゲストに招き、デジタルトランスフォーメーション（DX）やグリーントランスフォーメーション（GX）などモビリティ産業を取り巻く課題について活発な議論が交わされました。

より詳細な内容は
jama blogでお読みになれます
こちらからどうぞ！

▲モビリティ委員会委員長 十倉雅和氏（経団連会長・住友化学会長）

▲豊田章男委員長（自工会会長・トヨタ自動車会長）

▲有馬浩二委員長（部工会会長・デンソー会長）

▲片山正則委員（自工会副会長・いすゞ自動車会長）

▲日高祥博委員（自工会副会長・ヤマハ発動機社長）

自工会記者会見

1月からの新体制を発表
新会長に片山正則氏

自工会は11月22日、都内で4年ぶりとなるリアルでの記者会見を開催し、2024年1月からの新体制を発表しました。現会長の豊田章男（トヨタ自動車会長）が退任し、副会長の片山正則（いすゞ自動車会長兼最高経営責任者）が新たに会長に就任します。自動車業界は今、物流や資源、環境、通商など、大きく7つの課題を抱えています。新会長の片山を筆頭に、7人の正副会長、理事を中心に自工会が一丸となり、これらの課題に取り組んでまいります。

▲会長豊田章男（右）と新会長片山正則

会長の豊田は2018年に就任し、組織のスリム化などの自工会の改革をリードしてきました。改革の成果の象徴とも言えるのが、10月26日～11月5日に開催した「ジャパンモビリティショー2023」です。モーターショーからモビリティショーへと進化したジャパンモビリティショーには、前回の2.5倍に当たる475社が参加し、1日当たり10万人以上、合計111万2000人にご来場いただきました。

▲新体制を発表する会長

会長が就任時に事務局メンバーに対し、「自工会として（会長が代わっても）、ぶれない軸を一緒につくっていこう」と話していた通り、「自動車産業はみんなでやっている産業。未来はみんなでつくるもの」という考え方が、自工会の活動の軸になりました。会長は、「モビリティ産業を支える業界団体の土台はつくることができた」と、5年にわたる活動を総括しました。

また、会長からは「世界は対立と分断を深めている。こんな時代だからこそ、今を生きる大人たちが未来を担う子どもたちにどんな姿を見せるのか。それが大切だと思っている。日本には『ありがとう』という美しい言葉がある。私自身、モビリティ産業に関わる一人の大人として、これから生まれてくる子どものために、ありがとうと言い合える日本、信頼と共感に支えられた未来を多くの仲間とともにつくっていきたい」との未来に向けた想いを伝え、「自工会の会長は退任しますが、今後も業界の垣根を超えた仲間とともに『未来づくり』に取り組んでいく」考えを示しました。

会長の豊田から、たすきを引き継ぐことになった副会長の片山は、「自動車業界の課題の中でも、物流や商用領域は『物流の2024年問題』と言われるように、ドライバー不足をはじめとする喫緊の課題に直面しています。この課題は大型車メーカーだけではなく、乗用車メーカーや二輪車メーカーにも共通する課題です。

▲4年ぶりにリアル開催した記者会見

▲2024年1月からの新体制

こうした点から、ドライバー不足や物流効率化、運行管理など共通すべき課題が多い商用領域が当面のペースメーカーになるべきという議論にたどり着きました。」と言います。

片山は会長就任に当たり、「この立場に就任できることを誇りに思う一方、100年に一度という産業の変革の真っただ中で、会長のたすきを受け取る重責に、身の引き締まる思いだ」と抱負を語りました。その上で、物流課題の解決に向けた取り組みについて、「自動運転」「ドライバー層の拡大」などに取り組む方針を示しました。

また、カーボンニュートラル（温室効果ガス排出実質ゼロ）については、多様な技術の組み合わせで温室効果ガスの排出削減を目指す〝マルチパスウェイ〟の考え方のもと、「敵は炭素であり、内燃機関ではない」ということを世界に訴えていく方針です。マルチパスウェイに対する世界の理解は着実に広がりつつあります。片山は、「今後の2年間で今まで以上に地球環境保護への責任を果たし、エネルギー効率の向上、電動車普及など環境への貢献を積極化していく」と表明しました。

また、カーボンニュートラルに限らず、新しい技術やデジタル化の進化などの変革に対しては、「研究開発への投資を増加させ、新たな市場へのアクセスを改革することで競争力を維持し続ける」とも語りました。

▲抱負を語る新会長

新体制に向けた副会長の抱負

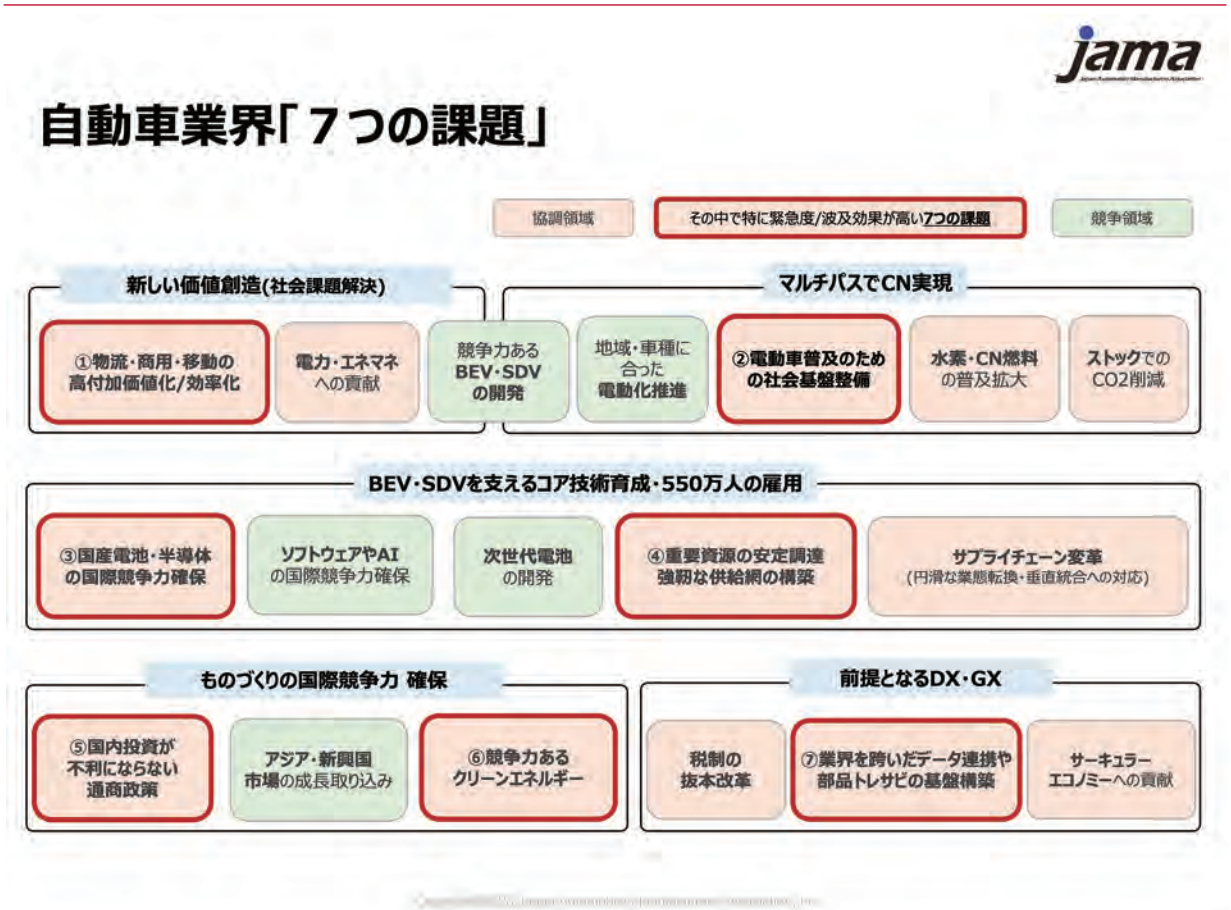
新体制では、6人の副会長で会長を支える、チーム一体となった運営体制を生かし、自動車業界が抱える7つの課題の解決を目指します。記者会見では、副会長も業界の発展に向けた強い決意を表明しました。

副会長 日髙祥博（ヤマハ発動機社長）

「チームで取り組んでいく体制ができた。微力ながら新会長を支えつつ、7つの課題に対し結果を出していく。それぞれの課題のリーダーが引っ張りながら、各社で情報を共有し、全体で前に進んでいくような形で頑張りたい。ジャパンモビリティショーでは、マスコミの報道からも温かいエールを感じた。今後もぜひ応援してほしい」

副会長 三部敏宏（本田技研工業社長）

「二輪や乗用車、商用車といったこれまでの枠組みを超えた新しいモビリティの世界に変わる。新しいモビリティが社会の構造を変えていく。こう



<自工会のブレない軸>

「自動車産業は、みんなでやっている産業」

「未来はみんなでつくるもの」

<喫緊の課題>

物流・商用領域

乗用車・二輪車につながる

▲チーム一丸で諸課題に取り組む

した変革期は、絶好のチャンスと捉えている。自工会が変革の主体者となって進めていくべきであり、今後、関連してくる産業との連携を含め、ここに座っているメンバーで強力に進めていきたい」

副会長 鈴木俊宏（スズキ社長）

「自工会が一丸となって、日本の産業力・競争力を上げていけるよう、そして地球環境などの課題解決に向けて取り組めるよう、片山新会長をサポートできるように頑張っていきたい」

副会長内田誠（日産自動車社長）

「ジャパンモビリティショーで掲げたように、人々の生活をいかに豊かにできるか、そのためにわれわれが社会的責任と雇用をどう守っていけるか、スピーディーに、真剣に取り組む必要がある。ここにいる皆さんと覚悟と勇気を持って取り組んでいく。そして自工会がより良くなったと応援してもらえるようにしたい」

副会長佐藤恒治（トヨタ自動車社長）

「これまでの風土改革が本当に効果を上げており、今の理事会の雰囲気は活性化している。副会長としてのキャリアは短いが、副会長同士の会話もフランクかつ活発にできるのは、これまでの改革で土台ができたからだ。新会長の片山さんとは、オン・オフを問わず話をしている。情熱を持って、いろいろなことに向き合っているリーダーであり、いろいろな考えを持っている。チーム一丸となって会長を支えていきたい」

副会長永塚誠一（自工会専務理事）

「豊田会長には、長期間、自工会の改革をはじめ、活動全般をリードしてもらい、感謝している。特にカーボンニュートラルへの多様な選択肢の重要性を内外に発信し、国際的世論にも影響を及ぼすことができたこと、経団連モビリティ委員会の発足、ジャパンモビリティショーへの変化など、業界の垣根を越えた活動を推進してもらった。豊田会長でないと実現できなかった大きな成果だ。豊田会長に築いてもらった土台を大切にし、モビリティ産業への変革に向けて片山新会長を支え、他の副会長や理事の皆さんと、この難局を乗り越えていきたい」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

自工会は新体制になっても、チーム一丸で自動車やモビリティを取り巻く諸課題に取り組んでいきます。引き続き、皆さまのご理解とご支援を、よろしくお願いいたします。

日本自動車工業会
記者会見

111万人が来場！ ジャパンモビリティショー閉幕

約70年間続いてきた東京モーターショーから名称・コンセプトを変革し、東京ビッグサイトで４年ぶりに開催した「ジャパンモビリティショー2023」が、10月26日（木）～11月５日（日）の会期を終えて閉幕しました。来場者数は目標の100万人を超え111万2000人、出展者数は前回（19年）の2.5倍に当たる475社と、多くの方々にご参加いただくことができました。ご来場いただいた皆さま、出展者の皆さまをはじめ、関わっていただいたすべての皆さまにお礼申し上げます。

「乗りたい未来を、探しに行こう！」をテーマに開催したジャパンモビリティショーは、名称を「東京」から「ジャパン」に、「モーター」から「モビリティ」に変えて開催しました。近い将来に発売するコンセプトカーの発表が中心だった従来のモーターショーから、自動車産業の枠を越え、さまざまな産業と共に日本の未来を創っていくショーへと生まれ変わりました。

多様なモビリティがつくり出す未来を表現

自工会では、新生ジャパンモビリティショーを象徴する各種の主催者プログラムを実施しました。メインの「Tokyo Future Tour」は、モビリティが変える未来の東京の街や、さまざまなモビリティによって広がる生活や食、遊びの未来、そして災害現場でモビリティがどう活躍するのかを「LIFE/EMERGENCY/FOOD/PLAY」の4つの切り口でご覧いただきました。

空飛ぶ車やパーソナルモビリティなどの展示のほか、ミュージカル仕立ての演出により、来場者の皆さまに、より一層楽しんでいただける内容といたしました。このTokyo Future Tourには、約50万人の方々にご来場いただき、多様なモビリティがつくりだす未来を多くの方にご体験いただきました。

▼未来の東京の街を表すイマーシブシアター

▲ライフ&モビリティ

▲エマージェンシー&モビリティ

▲フード&モビリティ

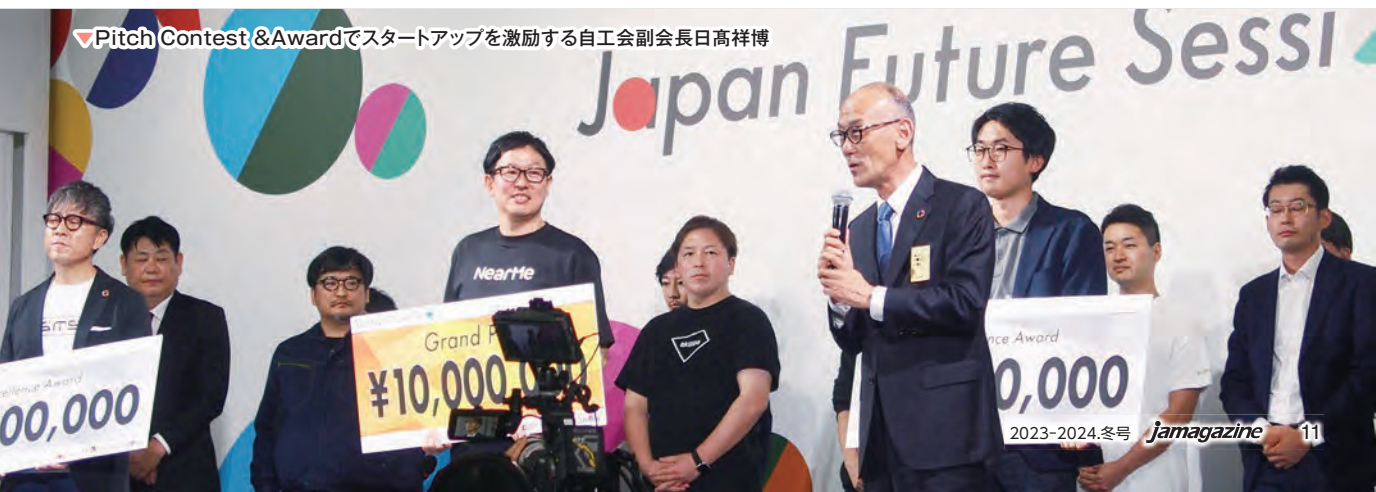
▲プレイ&モビリティ

スタートアップ支援プログラム

未来のモビリティを担うスタートアップ企業を支援するプログラム「Startup Future Factory」も初めて開催しました。大企業とスタートアップ企業が出会う機会を創出することにより、モビリティ産業を拡張・加速させることが目的です。災害・少子高齢化・地域創生・環境・ウェルビーイングの5つのテーマに沿って、大企業とスタートアップ企業が出会う場「Business Meetup」や、ブース展示「Startup Street」では、商談につながる打ち合わせ件数が430件進行し、これらをきっかけに実際に成約に至るケースもあり、大きな成果を上げることができました。

賞金総額1200万円を用意した「Pitch Contest & Award」は、「LIFE×Mobility　未来の暮らし」「EXCITEMENT×Mobility　未来の感動」「INFRASTRUCTURE×Mobility　未来の社会基盤」の3つのカテゴリーでスタートアップ企業を募集し、116社にご応募いただきました。11月4日（土）の決勝には、事前審査を勝ち抜いた15社が登壇。専門家ら9人の審査員による審査でグランプリ1社と準グランプリ2社を選出しました。グランプリには1000万円、準グランプリには、それぞれ100万円の賞金を贈りました。

グランプリを獲得したのは、シェアサービスを手掛ける株式会社NearMe（高原幸一郎社長、東京都港区）＝EXCITEMENT× Mobility未来の感動部門＝です。 同社は自宅やホテルと全国の空港をつなぐ、ドア・ツー・ドアのシェアサービスを手掛けています。シェアサービスの利用を促進することにより、生活者の価値観や行動を充実させ、地球にも、人に



▼Pitch Contest &Awardでスタートアップを激励する自工会副会長日髙祥博

もより良い、豊かな生活の実現を目指しています。

準グランプリ2社には、Global Mobility Service株式会社（中島徳至社長CEO、東京都千代田区）＝LIFE×Mobility　未来の暮らし部門＝と、Zip Infrastructure株式会社（須知高匡代表取締役、神奈川県秦野市）＝INFRASTRUCTURE×Mobility　未来の社会基盤部門＝が選ばれました。

Global Mobility Serviceは、世界の貧困・低所得者層の信用創造を行うスタートアップ企業です。支払い能力があるにも関わらず、与信審査に通らない人に、ローンの活用機会をつくり出し、モビリティの活用とともに、就業機会を創出しています。モビリティを使いたくても使えない人、売りたくても売れない人の双方の課題を解決することが目的です。

Zip Infrastructureは、自走式ロープウェイ「Zippar」を使って街づくりに貢献するスタートアップ企業です。デッドスペースとなっていた道路上の空間を使い、利便性・安全性・経済性に優れた次世代交通システムによって、「渋滞のない、どこでも駅徒歩5分圏内となる世界」をつくることを目指しています。

授賞式に出席した副会長の日髙（ヤマハ発動機社長）は、「参加した各社が、今後もっと大きくなり、日本を元気にしてもらいたい」と激励の言葉を贈りました。

授賞各社コメント

株式会社NearMe

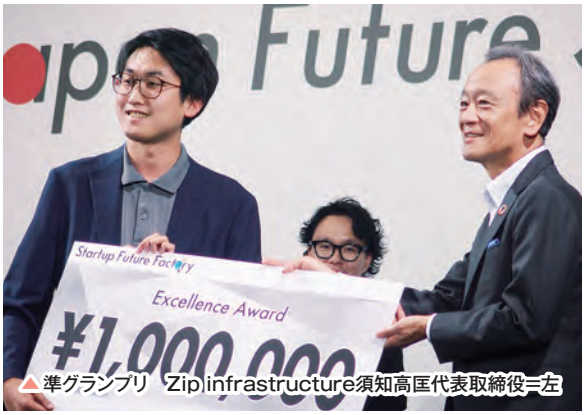
「NearMeにとって、グランプリの意味は大きく、これまで愚直に進めてきた、今やるべき『シェア乗り』の方向性や、今できることから社会実装している実績を評価いただいたのだと思います。シェア乗りを次の当たり前にするためには、スタートアップ1社では実現できません。今後は脱炭素や地域課題に関心のある連携パートナーを増やしていき、シェア乗り前提の車両開発にもチャレンジしていきたいと思います」

▲グランプリ　NearMe高原好一郎社長

▲準グランプリ
Global Mobility Service中嶋徳至社長CEO＝左

Global Mobility Service株式会社

「未来の暮らしを創出するスタートアップとして、優秀賞に選ばれ大変光栄です。今後もモビリティサービスを通じて、頑張る人が報われる社会の実現のため、自動車メーカーの皆さまや金融機関、そして提携各社の皆さんと連携を図っていきたいと思います」



▲準グランプリ　Zip infrastructure須知高匡代表取締役＝左

Zip Infrastructure株式会社

「（優勝を目指していたので）悔しいがうれしい、というのが率直な気持ちです。ただ、カテゴリー優勝ができたのは、日頃、開発や営業を頑張っている社員の皆のおかげだと思っています」

▲多くの来場者で一杯になった会場

マツコデラックスさんと自工会会長 豊田章男のトークショー

「モビリティ版ダボス会議」と銘打ち、モビリティと未来をテーマにしたトークショー「Japan Future Session」も連日開催し、合計4万2千人の方々にご来場・ご視聴いただきました。最終日の5日には、会長の豊田とタレントでコラムニスト・司会者のマツコデラックスさんとのトークショー「緊急企画！ジャパンモビリティショー大反省会　マツコデラックス×自工会会長　豊田章男」を開催し、会場とオンライン中継を合わせ、多くの方々にご参加いただきました。

会長の豊田は、「世界のモーターショーの来場者がどんどん減少する中で、何とかしなければならないと考えたのが4年前のモーターショーだった。何をやってもいいから、とにかく一回、人を集めてみようということで取り組み、130万人が集まった」と前回の東京モーターショーを振り返りました。

そして、「自動車が動くと100万人が集まる。今回は未来づくりに参加する人や、車好き・運転好き、ベンチャー、他の産業と、いろいろな人を集めてやろうということで、名称を『東京』から『ジャパン』に、『モーターショー』から『モビリティショー』に変えた」と、東京モーターショーをジャパンモビリティショーに変えた経緯を紹介しました。

スタートアップ支援を新たに取り入れたことについては、「モビリティの未来をつくっていくためには、日本で活躍している、あるいはこれから活躍しようとするスタートアップと投資家をマッチングし、新しいビジネスの第一歩にしてもらうことが必要」と狙いを語りました。その上で、「自動車を軸にしてもらえば、多くの人にマッチングの機会を与えられる。その効果が出てきているのではないか」と話しました。

「多様化」も今回のジャパンモビリティショーのテーマでした。会長は、ソファ型のモビリティや、耳の聞こえない人のために音を映像で表す技術などの出展事例を挙げ、「モビリティと名称を変えたことで、多くの選択肢が移動手段として出てくる可能性を感じた」と感想を述べました。

会長は、「第1回のジャパンモビリティショーは今日で終わるが、これが日本から世界に発信するスタートであってほしい。ご参加いただいた方々が、モビリティは自分の未来にどう影響してくるのだろうと、少しでもお考えいただいた2週間であったなら、主催者としては大成功だったと思う」と締めくくりました。

東京モーターショーから生まれ変わったジャパンモビリティショーはいかがだったでしょうか。自工会はこれからも、自動車産業の枠を越え、新たな価値を創造するモビリティ社会を皆さまと共につくっていきたいと考えています。次回のジャパンモビリティショーにも、ぜひご期待ください。

ジャパンモビリティショーが「日本カー・オブ・ザ・イヤー実行委員会特別賞」を受賞！

一年を代表するクルマや技術を選び、表彰する「日本カー・オブ・ザ・イヤー」。この度、その特別賞に「ジャパンモビリティショー2023」が選定されました。

より詳細な内容は jama blogで お読みになれます

こちらからどうぞ！

BICライブラリに「くるまコレクション」が開設

自動車や自動車産業に関わる書籍、雑誌、写真などの資料を数多く所蔵してきた「自動車図書館」が機械振興会館（東京都港区）内の「BICライブラリ」に統合され、新たに「くるまコレクション」として11月1日にオープンしました。11月21日にはオープンセレモニーが開催され、記念講演も行われました。

地下鉄神谷町駅や御成門駅から徒歩約8分、東京タワーの向かい側にある機械振興会館の地下1階にあるのがBICライブラリです。機械産業の専門図書館として、これまでも自動車産業に関する書籍や資料などを数多く所蔵してきました。くるまコレクションは、このBICライブラリの会議スペースだった場所に設置されました。自動車図書館が所蔵していた図書1万2千冊以上、雑誌237種類・2万8千冊の合計4万点以上をここに移管しました。

自動車図書館は1970（昭和45）年8月当時、「東京モーターショー」の主催団体だった自動車工業振興会（自工振）が収集していた図書や資料などを、外部からの問い合わせや閲覧希望者に対して公開するサービスとして開設しました。自工振が日本自動車工業会（自工会）に統合したのを機に、2002年からは自工会の運営となり、04年には自工会とともに、東京・大手町から芝大門の日本自動車会館に移転。国内外の自動車に関する文献や映像資料などを所蔵する、国内でもユニークな自動車専門図書

▲機械振興会館内のBICライブラリ入口

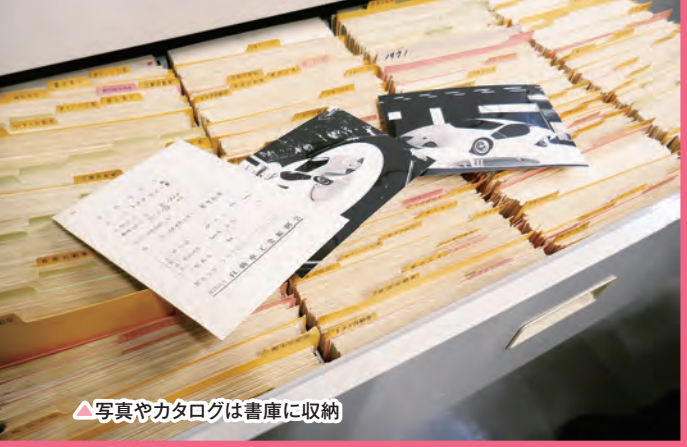
▲くるまコレクション　各自動車メーカーやディーラーなどの社史が並ぶ

▲スクラップ帳などの資料も移管

館として、多くの研究者やマスコミ、一般の方々に利用されてきました。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により20年から休館していました。その間に自動車図書館の在り方を検討し、BICライブラリに蔵書を統合いただくことで、自動車以外の産業も含めた幅広い情報や知識を1か所で得ることができるよう見直しをしました。BICライブラリにとって、スペースの確保など受け入れは簡単ではありませんでしたが、「利用者の方に、より多くの情報を発信したい」「自動車図書館のコレクションを散逸させてはならない」（BICライブラリ担当者）という思いで、くるまコレクション設置をかなえることができました。同館の司書は、「これから自動車のことをさらに勉強し、来館される方に有益な情報を提供したい」と話します。

新設されたくるまコレクションのコーナーには、団体や調査会社の統計資料、自動車メーカーの社史、自動車雑誌、自動車部品の専門書など、自動車図書館にあった資料がずらりと並びます。収まりきらない蔵書は、地下2階の書庫にスペースを確保して収めました。棚やキャビネットは、自動車図書館で使用していたものをそのまま使用しています。1954年に開催された「第1回全日本自動車ショウ」の写真など、貴重な写真やカタログ類が保管されています。

11月21日に開催された、くるまコレクションオープン記念セレモニーには、多くの関係者が出席し、くるまコレクションの開設を祝いました。会場には、過去の「自動車ガイドブック」やカタログなど、くるまコレクションの蔵書の一



▲写真やカタログは書庫に収納

▲個人利用できるブース

▲セレモニー会場では、くるまコレクションの一部を紹介した▶

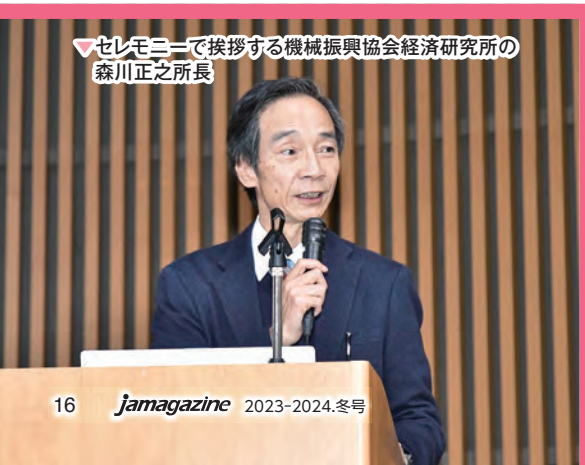
部を並べ、出席者に紹介しました。

機械振興協会経済研究所所長で一橋大学特任教授の森川正之氏がセレモニーの開会に当たり挨拶し、「図書館は経済において貴重なインフラ。くるまコレクションが加わったことで、規模も大きくなった。多くの人にますますBICライブラリを活用していただきたい」と呼びかけました。

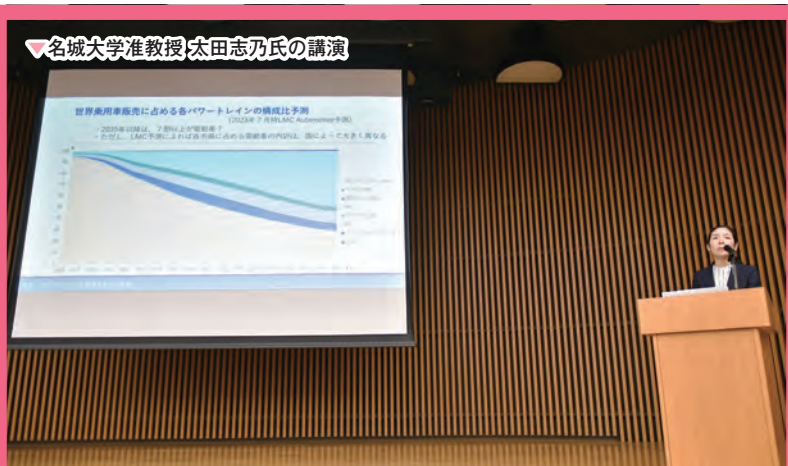
講演には、機械振興協会経済研究所特任フェローで名城大学経済学部准教授の太田志乃氏と、電気通信大学産学官連携センター（ベンチャー支援部門）客員教授の竹内利明氏が登壇しました。

太田氏は、「グローバル『自動車』産業の動向」と題し、電動化やモビリティ産業への変革期にある自動車産業と、それに伴うものづくりの変化について講演しました。太田氏は、「グローバルな自動車産業が大きくEVにシフトもしくはプラグインハイブリッド車やハイブリッド車を含め、電動化していくことは当然のこと」とし、「これに加え、自動車産業がモビリティ産業に移行していく現在、完成車メーカーや大手部品メーカーだけでなく、中小も含めたサプライチェーンが大きく変容していく」との見通しを示しました。

さらに、大手自動車メーカーが電動化やモビリティ産業への移行を踏まえて投資配分を変化させていることや、スタートアップ企業を含めた仲間づくりが特に欧州で進んでいる事例を挙げました。そして、こうした動きによって、「自動車の造り方にも変化が出てきている」と指摘。「工作機械や金型産業を含め、周辺産業にも影響が出てくることは自明。自動車ないし



▼セレモニーで挨拶する機械振興協会経済研究所の森川正之所長



▼名城大学准教授 太田志乃氏の講演

▲BICライブラリの広々とした閲覧室

モビリティ産業をどのように見ていくのか、あるいはどのように研究していくのか、というテーマにおいて、くるまコレクションにもぜひ足をお運びいただきたい」と話しました。

竹内氏は、「学生ベンチャー支援における図書館情報の活用」と題し、全国にある公立や民間の特徴ある図書館の数々を紹介しました。中でも、BICライブラリなどの専門図書館には、資料に精通した専門の司書がいるとし、「相談できる司書がいることが非常に重要なポイント。自分で探すのも良いが、司書に相談すると、自分では気付かなかったことに気付くこともある」と、図書館の活用方法について解説しました。

その上で、電気通信大学が取り組む学生ベンチャー支援の取り組みを紹介し、「企業が学生の取り組みを評価してくれるケースが増えている。少額でもお金をつけて実証してみると、花が咲くものもたくさんある」と、豊かなアイデアを持つ学生を支援する意義を語りました。竹内氏は、「学生はインターネット上にある情報がすべてだと思っているが、ネット上に無い情報もたくさんある。学生ベンチャー支援においては、ネットで入手できない、出典の明らかな情報を、図書館を通して伝えていきたい」と話しました。

BICライブラリは、広々とした閲覧スペースのほか、個人で利用できるブースも備えています。所蔵の確認をインターネットで行えるほか、貸出サービスも行っています。くるまコレクションが加わり今まで以上に利便性が増したBICライブラリをぜひ利用してみてください。

▼電気通信大学 産学官連携センター客員教授 竹内利明氏の講演

▼オープンセレモニーではレセプションも開催

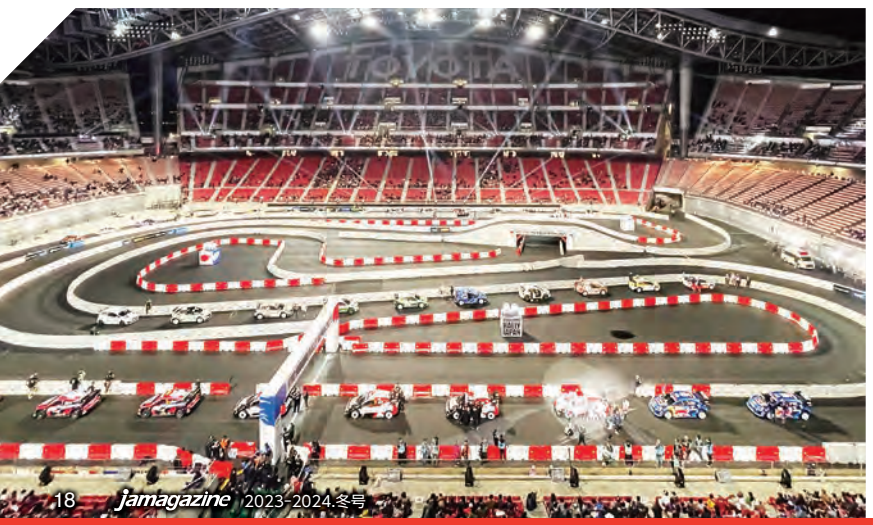
ラリージャパン2023
トヨタが表彰台を独占

2023年世界ラリー選手権（WRC）の最終戦「フォーラムエイト・ラリージャパン2023」が11月16～19日、愛知と岐阜の両県で開催されました。結果は、トヨタ自動車のエルフィン・エバンス選手（ドライバー）とスコット・マーティン選手（コ・ドライバー）が優勝し、トヨタ勢が上位3位を独占しました。地元・愛知県出身の勝田貴元選手は、2日目にクラッシュして最下位まで順位を落としたものの、猛追して5位に入りました。今年は主催者に愛知県豊田市も加わり、豊田スタジアム（同市）に特設コースを設置。多くの観客が身近に観戦できる環境が整い、国内外のラリーファンが熱狂しました。

WRCは1973年にスタートした半世紀の歴史を誇る世界最高峰のラリー競技です。サーキットを周回するレースとは異なり、ラリーは封鎖した一般道でタイムを競う競技区間の「スペシャルステージ（SS）」と、SS間の公道を交通法規を守りながら一般車両に混じって移動する「リエゾン」で構成されます。ラリージャパンのSSとリエゾンは、5市1町にまたがる約970kmにも及びます。

今年のラリージャパンで最大の見どころとなったのが、豊田スタジアム内でのスーパーSS（SSS）です。同スタジアムは普段はサッカーなどの競技が行われていますが、芝生をすべてはがし、全面をアスファルト舗装して専用のコースを設置しました。芝生はトヨタが運営する富士モータースポーツフォレスト（静岡県小山町）などで再利用すると言います。

▼最大の見どころとなった豊田スタジアムSSS



通常のSSは1台ずつ走りタイムを競いますが、豊田スタジアムのSSSでは2台が同時に走行するのが特徴です。豊田市の担当者は「前回、スタジアムには6万人が訪れたが、実際の競技を観戦することはできなかった」と話します。最も集客を図ることができる豊田スタジアムでSSを実施することで、より多くの観客がラリー競技を間近で体感しました。今回の有料観客席の来場者数は9万300人

SSSでは2台同時にタイムを競う

昨年の問題点を踏まえ、会場を変更した岡崎SSS

となり、そのうち、同スタジアムの来場者数は6万7600人でした。

前年開催を踏まえた改善の取り組みは、愛知県岡崎市で開催したSSSで見られました。前年の岡崎SSSは乙川河川敷（同市）で開催しましたが、ラリー車両が疾走すると砂煙が舞い、競技がほとんど見えなくなる問題が発生しました。今年は岡崎中央総合公園（同市）に会場を移し、コースを舗装路に改めました。コースレイアウトも工夫を凝らし、身近に競技が体験できる観覧エリアも多く設置しました。

ラリー競技は広域にSSが点在します。ラリージャパンの開催エリアは、愛知県の豊田市、岡崎市、新城市、設楽町と岐阜県の恵那市、中津川市の5市1町にまたがります。今回、主催者に加わった豊田市はヘリコプターを活用した観戦スタイルにも挑戦しました。フィンランドなどで開催されるWRCでは、ヘリを使ってSS間を移動する観戦スタイルが定着していますが、日本では法規やコストが課題となっています。今回、ヘリ発着場所を5カ所確保して試験的に観戦ツアーを組みました。来年以降は、ヘリの数を増やすなどして富裕層向けのプログラムを検討しています。担当者は「ヘリを活用したホスピタリティープログラムで上げた収益を、子どもたちの招待費用などに充てたい」と話します。

▲トヨタ勢が上位を独占した

昨年のラリージャパンは、ヒョンデチームが1、2位となりました。トヨタは12年ぶりの母国ラリーで悔しい敗北を喫しましたが、今年は上位3位を独占し、見事にリベンジを果たした格好です。WRCトップカテゴリー「ラリー1」で唯一の日本人ドライバーの勝田選手は、昨年の3位入賞から今年は優勝を目指しましたが、2日目のSSでクラッシュ。一時は最下位まで順位を落としたものの、その後のSSでトップタイムを連発して5位まで順位を上げました。

トヨタの参戦と日本人ドライバーの活躍、そして地元自治体の取り組みが奏功し、今年のラリージャパンの来場者数（速報値）は、イベント参加や沿道の応援なども含め、4日間で延べ53万6900人に上りました。トヨタの豊田章男会長は、「このラリーを続けていければ、モータースポーツが文化となって日本にさらに根付いていけると信じている」と語ります。ラリージャパンは来年も愛知と岐阜の両県で11月21～24日、開催される予定です。

自動車技術会が「自動運転AIチャレンジ」を開催

次代を担う技術者を目指せ―。自動車技術会（自技会：大津啓司会長）は11月12日、自動運転のプログラミング技術を競う「自動運転AIチャレンジ2023・インテグレーション大会決勝競技」を、千葉県柏市の東京大学生産技術研究所（柏キャンパス）で開催しました。今回は「小型モビリティにおける工場内での自動搬送」をテーマに、出場者たちは開発したソフトウエアを組み合わせた自動運転車の走行距離を競いました。

自動運転AIチャレンジは、CASE（コネクテッド、自動運転、シェアリング、電動化）やMaaS（サービスとしてのモビリティ）などの新たな技術領域において、自動車業界をけん引する技術者の発掘と育成を目的に、2019年から継続して開催しています。次世代技術、特に自動運転に関しては、人工知能（AI）やICT（情報技術）などが競争領域になる中で、これらの領域に携わる技術者が不足している現状にあります。

同大会は学生だけでなく企業や海外のチームも参加可能なため、AIにおける国際的なイベントとすることで、高い技術レベルの人材育成につなげる狙いもあります。21年度までは年に一度の開催でしたが、22年度より「インテグレーション」と「シミュレーション」の2大会に分け、年に1回ずつ開催する形式となりました。

実車を用いず、システム上でスコアなどを競うシミュレーション大会に対し、インテグレーション大会は自技会が用意した車両に出場チームが開発したプログラムを搭載して実走させます。車両を自動走行させ、完走を目指すには、LiDAR（ライダー）などのセンサー類に関わる知識に加え、AIやソフトウエア、情報処理など多様な知識や技術力が必要になります。

今回のインテグレーション大会では、小型モビリティにおける工場内での自動搬送を課題に設定しました。ベース車両であるヤマハ発動機のゴルフカート「AR-04」に、各チームが開発した自動運転ソフトウエアを搭載し、自律走行した走行距離を競い合います。工場内自動搬送で用いられ

▲開発したソフトウエアの性能が勝負を左右

▲チームで協力して課題に臨んだ▶

▲視界が悪い中でも走行を続けられるかが一つの判定基準

▲難易度が高かったL字クランク

▲最優秀賞チーム「IEI_AutoDRRT」のメンバー

る自動運転システムは、低価格の車両で高いタスク処理能力を実現することが求められます。そのため、限られたコンピューティングリソースとシンプルなセンサー群のもと、「安全性」「可用性」「走破性」の3点をバランスよく実現することが社会実装する上では重要になります。

競技においても、この3点の達成度が評価の基準になりました。工場内では車両と人が混在する走行環境が想定されます。そのため、競技では、段ボールを道路上に配置することで無作為に置かれた残置物を確実に検知し、安全に停車できるかを課題項目としました。

石油化学プラントなどでは、地面付近に設置されたパイプから出る蒸気がモビリティに搭載されたセンサー類の視野を遮ることがあります。競技では、蒸気に見立てた煙を発生させ、視界が悪い中であっても、止まらずに走行を続けられるかを競いました。煙に反応して停車する車両も多く、社会実装のハードルの高さを感じられる課題でした。

そして、多くのチームを苦しめたのは、S字クランクと、徐々に道幅が狭くなるL字クランクの2つです。特にL字クランクは、道幅だけでなく直角のコースをはみ出さずに走行することもクリアの条件としており、「速度が速すぎたり、遅すぎたりして停まってしまうケースが多々あった」（自技会関係者）と言います。

175チームが出場した予選競技を勝ち抜いた16チームが決勝に進出しましたが、ルートの難易度の高さから、残念ながらゴールにたどり着いたチームはありませんでした。

最優秀賞を勝ち取ったのは、中国のソフトウエア企業チーム「IEI_AutoDRRT」です。中国のソフトウエア会社であるインスパーエレクトロニックインフォメーションジャパンに所属するエンジニア2人で構成されるチームで、近年は自動運転車用ソフトの開発も始めたといいます。初出場での栄冠となりましたが、チームリーダーを務めた劉宏鋼さんは、「来年も出場して連覇を狙いたい。チームを増強して、日本以外の大会にも挑戦していく」と意気込みを示しました。

その他の受賞チームは以下の通りです。優秀賞＝「TLAB」（東京大学大学院）、3位入賞＝「UCLab_challengers」（名古屋大学）。

バステク in 首都圏 が さいたま市で開催 安全・快適性をアピール

バスに関する最新技術を展示する「バステク in 首都圏」（ぽると出版主催、国土交通省関東運輸局後援）が12月1日にさいたま市営桜木駐車場（さいたま市大宮区）で開催されました。国内外のバスメーカーのほか、バスの機器・用品・システムの企業も出展するこのイベント。バス事業者や大型車メーカーといった業界関係者を中心に、多くの人が会場を訪れました。

バステク in 首都圏は、バス専門誌「バスラマインターナショナル」を発行する「ぽると出版」が主催しています。関西地区では「バステクフォーラム」の名称で開催しており、2015年から首都圏でも開催するようになりました。今年も国内外メーカーの数々が出展し、日本からも、いすゞ自動車、三菱ふそうトラック・バス、そして、いすゞと日野自動車が共同出資するバス製造会社のジェイ・バスが出展し、安全性や快適性をアピールしました。

いすゞが出展したのは、中型路線バス「エルガミオ」です。エルガミオは、2022年12月に一部改良し、標準搭載のドライバー異常時対応システム（EDSS）に自動検知機能を追加しました。わき見や居眠りを検知した場合、運転席シートのバイブレーターを作動させることで、ドライバー

▼いすゞの中型路線バス「エルガミオ」

▼エルガミオにはドライバー異常時対応システムを搭載

▲ボディプリントを施した三菱ふそう「エアロエース」

▲ジェイ・バスの「ファン！バス」

▲観光バス仕様の三菱ふそう「ローザ」

▲ジェイ・バスの車室内モニター

に警報を発し、注意を促します。また、バス車内の換気性能を向上する「エアアウトレットグリル」も装備しました。新型コロナウイルスの感染拡大以降、感染症対策の観点から、車室内の換気性能に対するニーズが高まっており、一部座席の足元に設けることで、車内外からの排気・吸気能力の向上を図りました。

三菱ふそうは、大型観光バス「エアロエース」と小型バス「ローザ」を展示しました。車両展示に加え、子会社の三菱ふそうバス製造が手がけるボディプリントを紹介しました。車体に画像データを直接印刷するもので、同社によると、フィルムラッピングに比べ、コストを半減以下に抑えられるといいます。バスだけでなく、乗用車やトラックにも印刷することが可能で、新規事業として売り上げの拡大を目指しています。またローザは、観光仕様車を展示しました。外国人観光客の需要などにも対応できるよう、荷室を広く確保しています。

ジェイ・バスは、降車確認支援システムなどを取り付けた「ファン！バス」を出展しました。子ども置き去りによる事故が社会問題となっており、23年4月からは送迎バスへの幼児置き去り防止装置の設置が義務化されています。ジェイ・バスは、降車確認支援システムを搭載した車両の展示を通じ、社会問題の解決に寄与します。また、開発中の車室内モニターも公開しました。カメラを4カ所に設置し、ドライバーがカメラで車内全体を確認できるようにします。現在は、ミラーで車室内を確認していますが、カメラにすることで、運転手の視線移動を最小限に抑えることができます。ミラー越しに乗客と視線が合うことによるトラブルを回避できるというメリットもあるといいます。

地域の足を支え、身近なモビリティの一つでもあるバスは、乗用車と同様、技術によって安全性や快適性が年々進化しています。バスに乗車するときは、最新技術がどのように使われているのかに注目してみてはいかがでしょうか。

クルマと一緒に楽しめる

自動車メーカーのカフェ&レストラン

自動車メーカーには自社で運営するショールームやミュージアムなどの施設があり、気軽に最新モデルを観たり、自動車文化や企業の歴史に触れたりすることができます。そうした施設には、カフェやレストランも併設されており、「観る」だけでなく、「飲む・食べる・語らう」といった楽しみもあります。

いすゞ自動車

いすゞ自動車には、藤沢工場（神奈川県藤沢市）の隣接地に「いすゞプラザ」というコミュニティー施設があります。創立80周年を記念して2017年に開設したもので、施設ではいすゞの歴史やものづくりの紹介、最新のいすゞ車、貴重なレストア車の展示などを行っています。この施設に併設しているのが、「SAKURA Café（サクラカフェ）」です。ガラス張りの、モノトーンモダンで開放的なダイニングスペースでお茶やランチを楽しむことができます。

いすゞプラザの「SAKURA café」

レクサス

レクサスは、ブランド体験スペース「INTERSECT BY LEXUS - TOKYO」（東京・港区）を運営しています。この1階にあるカフェでは、産地やオーガニックな豆にこだわり独自に焙煎したオリジナルブレンドやお食事をご提供しています。また、落ち着いた雰囲気の2階のビストロラウンジでは、アラカルトからコースまで季節を感じるお食事を楽しむことができ、一部のメニューやパンはテイクアウトもご利用いただけます。

レクサス「INTERSECT BY LEXUS - TOKYO」

日産自動車

日産自動車のブランド発信拠点「NISSAN CROSSING」（東京・中央区）には、独自のラテアートが楽しめるカフェがあります。2階の「CROSSING CAFE」です。ここでは「MACCHI-ART」と名付けたラテを提供しています。最先端技術を用い、お客さまの好みの車のほか、お客さま自身の顔などを描くこともできます。日産の車のカラーリング名がつけられたオリジナル炭酸ドリンク「CROSSING SODA」も人気です。

日産「CROSSING CAFE」

日野自動車

日野自動車には、地域との融和・情報の発信基地・次世代の育成を目的とした施設「日野自動車21世紀センター」（東京都八王子市）があります。この中にあるカフェ「シャノン」では、施設の利用者のために飲み物や軽食を用意しています。同センター内には、トラック・バスの博物館「日野オートプラザ」や研修施設があり、一般の人も利用できます。博物館には歴史的に貴重なバス・トラックを数多く展示しています。見学と合わせ、カフェを利用してみてはいかがでしょうか。

日野「シャノン」

本田技研工業

本田技研工業には本社（東京・港区）1階の「Hondaウエルカムプラザ青山」内に、「MILES Honda Cafe」があります。訪れたお客さまを癒し、元気づけ、次の旅へと誘う―。そんな場所でありたいという想いを「MILES」に込めました。地下にあるカナダ産ヒバの大樽で受水したまろやかな「宗一郎の水」を使ったドリンクや美味しいスイーツを提供しています。世界中のHonda製品・活動・想いを伝える展示や映像を見ながら、くつろいでいただける空間です。

ホンダ「MILES Honda Cafe」

三菱自動車工業

三菱自動車工業の本社ショールーム（東京・田町）には、1階にテイクアウト専門のカレーショップ「DELICA CURRY」、2階にティースタンドがあります。田町駅からつながる歩行者通路に面したティースタンドでは、こだわりのドライフルーツがたっぷり入ったフルーツティーを楽しむことができ、ショールームで最新の三菱車をご覧頂いたあと、ゆったりとした時間を過ごしていただけます。カレーショップは日替わりの2種類のルーと、2種類のライスから選ぶ事ができ、近隣オフィスやお住まいの方にご利用頂いています。

三菱自動車本社ショールームのティースタンド

このように、自動車メーカーのショールームなどの展示施設には、お茶や食事を楽しめるところもあります。一度、立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

EVを正しく理解し、冬のドライブを快適に！

▲日産自動車車両計画・性能計画部燃費電費・動力性能計画グループ主管
土川晴久さん

冬になり、今年も車の中で暖房を使う季節がやってきました。ガソリン車やディーゼル車、ハイブリッド車など、エンジンを搭載している車は、一般的にエンジンから発生する熱を利用して室内を暖めていますが、エンジンを搭載していない電気自動車（EV/BEV）の場合はどうなのでしょうか。冬場のEVの特性について、EVのパイオニアである日産自動車で、軽自動車のEV「日産サクラ」の開発を指揮した坂幸真さんと、エネルギーマネジメントシステムの開発を手がける土川晴久さんに聞いてみました。

EVは走行用にも使用する電気で熱をつくり、車室内を暖めます。このためEVの場合は、これまで冬場に航続距離が短くなると言われてきましたが、果たしてどうなのでしょうか。実際、2010年に発売した初代「日産リーフ」の最初期のモデルでは、冬場に暖房を使用して走行した場合、条件によっては航続距離に大きく影響する場合もあったといいます。このイメージが根強く残っていることによって、EVの冬場の航続距離に対して不安を持っている方や、近年、降雪地域で雪による立ち往生が発生することもあり、心配になる方もいらっしゃると思います。

自動車メーカーや部品メーカーでは、ユーザーがよりEVを使いやすくするために、冬場や雪国での弱点を克服することを課題と捉え新しい技

▲ヒートポンプシステム採用でEVの暖房効率は向上

EVの航続距離を延ばす運転の仕方

- 省エネルート探索を使う
- 穏やかな加減速
- ECOモードを使う
- 控えめな空調温度設定

日産自動車ウェブサイトより作成

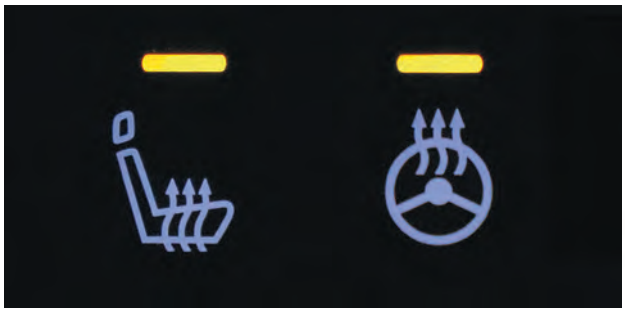
術を開発してきました。中でも、土川さんが「最も効果が大きい」と話すのが、ヒートポンプシステム（省電力暖房システム）です。これは省エネ家電や最新の自動販売機にも採用されている車室内を少ない電力で効率的に暖めることができる技術です。初代日産リーフを最初にマイナーチェンジした2012年から、日産のEVにはすべて搭載されています。その後も、ヒートポンプシステムは進化を続け、暖房の消費電力抑制に大きく寄与しています。

例えば、2022年に発売された日産サクラの場合、冬場の航続距離の減少は、日常的な使い方であれば2〜3割程度の減少に留まり、減少幅は大きく改善しています。

また、ドライバーの運転の仕方も、EVの航続距離に大きく影響します。冬場に限ったことではありませんが、EVはパワートレイン効率が非常に高い反面、ガソリン車よりも空気抵抗の影響を受ける割合が大きくなります。したがってスピードを控えめに走行いただくことによって空気抵抗を低減し、ガソリン車よりも効率的に航続距離を延ばすことが可能です。また、ガソリン車同様に急な加減速を避け、減速するときはアクセルペダルを緩める回生ブレーキを活用することにより、減速時にモーターから取り出すエネルギーを最大化できます。

また、自宅充電時にタイマーやリモコンで充電器経由の電力を活用して乗車前に室内を温めておくエアコンを活用する方法もあります。さらに、シートヒーターやステアリングヒー

▲日産自動車第三製品開発部第二プロジェクト統括グループセグメントCVE
坂幸真さん



◀シートヒーターなどを使いエアコン使用量を減らすこともポイント▲

ターは消費電力が少なく、短時間で発熱し、乗員をピンポイントで温めるため、エアコンの設定温度を低めに抑えても快適に過ごすことができます。車両自体の技術進化に加え、こうした賢い節電のコツを実践すれば、もはやEVは冬場や雪国でも安心して乗れる車と言えるでしょう。

坂さんは、「『暖房の使用が航続距離に影響する』という事実を正しく知ってもらうことが重要」と指摘します。

これは、一般のEVユーザーや購入を検討している方全員が知っている訳ではありません。EVの特性をきちんと伝えることで、EVに効率的な走り方や使い方を広げていくことが大切です。

今後さらに新型のEVがどんどん市場に投入されていくことが予想されます。自動車メーカーは、航続距離を延ばすためのさまざまな技術開発を進める一方、EVの特性を、ユーザーに正しく理解してもらうための情報発信を続けていく必要があります。自工会としても、EVをはじめHV/HEV、PHV/PHEV、FCV/FCEVなどの次世代自動車の特徴をユーザーにきちんと理解していただくことで、ユーザーがそれぞれのライフスタイルに合ったパワートレインを正しく選ぶことができ、充実したカーライフを楽しむことができるよう、これからも情報発信を続けていきます。

2023 第7回

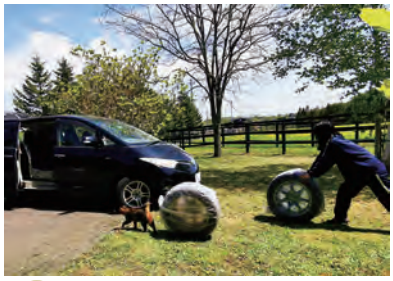
小学生「クルマのある風景」フォトコンテスト

応募総数5,672点から最優秀賞5点を選出

「車との旅」
赤堀 帆菜　静岡県／6年生

「きれいな星空」
須藤 のどか　東京都／4年生

「沈下橋を渡る愛車」
平野 陽大　高知県／4年生



「こっちだよ」
加治屋 秀星　北海道／6年生

「しゃぼん玉とクルマ」
柏木 美結　北海道／3年生

経済広報センターは、2023年5月29日から9月15日までの期間、日本在住の小学生を対象に、「クルマのある風景」フォトコンテストを実施しました。総数5,672点（応募者数1,730名）の応募の中から、最優秀賞5点、優秀賞10点、佳作10点を選出しました。

今年で7回目となるこのコンテストは、将来のモビリティ社会を支えていくことが期待される若年層の関心を高めるべく、子どもたち（小学生）に、クルマへの親しみを覚えてもらい、魅力を感じてもらうことを目的に実施しています。

応募テーマは、「クルマのある風景」とし、自宅で、街角で、旅先で撮ったクルマ、家族と一緒に撮ったクルマ、自然や風景の中で撮ったクルマなど、クルマが写っている写真としました。審査は学識経験者や報道関係者など4人で行い、テーマ性、主題性、表現性・独創性など総合的に優れた作品を選びました。

最優秀賞に選ばれた5点は、いずれも小学生らしい着眼点とアイデアで、身近な存在であるクルマとの心が躍る楽しい関係を伝える作品として大きく評価されました。また、今回も1年を通して撮影された写真が寄せられ、子どもたちの発想を豊かに広げる本コンテストの定着が感じられました。

編集後記

18年の歳月を経て…

今年のプロ野球は阪神タイガースが18年ぶりのセリーグ優勝、38年ぶりの日本一を達成した。38年前は出生前につき、18年前を振り返ると、当時の阪神タイガースは、打撃ではシーツ、金本、今岡の強力クリーンアップ、投げる方では、JFKと呼ばれる7回以降は点を取られない鉄壁の救援陣を形成していた。今年は、18年前のような強烈な打撃陣、投手陣ではなかったが、チャンス、ピンチに強いメリハリのある野球をしていたと思う。

38年という四半世紀以上の長い年月を経て、日本一を達成したことには、喜びと呆れという二つの感情が入り混じった複雑な感情を抱く。それほどまでに長い時間が経った。38年前、入団6年目の岡田彰布選手が、コーチを経て監督を務めている。しかも13年ぶり、二度目の登板だ。

18年前、父と二人でテレビ中継を楽しみにしていた。外出時は試合の開始時間に間に合うよう、父はクルマを飛ばした。「クルマの中でテレビが見られればなぁ」とよく思ったものだ。2005年少年だった私は、クルマの中でテレビを鑑賞できるようになるとは想像もしていなかったが、阪神は2006年も優勝すると思っていた。2006年、阪神は優勝しなかったが、ワンセグ放送が開始された。

先月、先々月と行われたJMSでは、最新技術が会場を彩った。そのうちの一つ、自動運転技術は乗車中のゲームプレイを可能にするなど、今までの乗車体験を変えると言う。自動車業界は大変革期を迎え、クルマの進化のスピードもどんどん上がっている。来年阪神が優勝し、創設以来初の連覇を達成したら今年以上に驚くが、クルマの中でゲームができるようになっても19個歳をとった私は驚かないだろう。

S.R.

積雪路・凍結路を走るなら

ノーマルタイヤ NO

PIXTA

冬場になると、道路の積雪や凍結により、ノーマルタイヤを装着した車両が立ち往生して、深刻な交通渋滞や通行止めを引き起こしています。

詳しい情報はコチラ

積雪・凍結道路ですべり止めの措置をとらない運転は

法令違反

反則金 普通車6千円

となります。

都道府県道路交通法施行細則または道路交通規則にて積雪または凍結した路面での冬用タイヤの装着等いわゆる防滑措置の義務が規定されています。（沖縄県を除く）
違反行為は、反則金の適用となります。（大型車：7千円、普通車：6千円、二輪車：6千円、原付車：5千円）

※タイヤチェーン未装着車の通行を禁止する規制時は、冬用タイヤであっても、タイヤチェーンの装着が必要です。

一般社団法人日本自動車タイヤ協会

事業者、ドライバー、整備工場の皆さんの協力をお願いします。

防ごう 大型車の 車輪脱落事故

危ない！

お・と・さ・な・い

おとさぬための点検整備

事前の正しい点検が大きな事故を未然に防ぐ唯一かつ最善の手段です。

トルクレンチで適正締付

適正なトルクレンチによる規定トルクの締め付け、タイヤ交換後の増し締めの実施。

動画をチェック！

正しい点検方法や連結式ナット回転指示インジケーターの使用方法をご案内しています。

さびたナットは清掃・交換

ディスクホイール取付面、ホイールナット当たり面、ハブの取付面、ホイールボルト、ナットの錆やゴミ、追加塗装などを取り除きます。

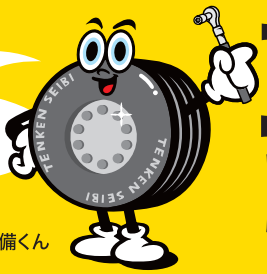
ナット・ワッシャー隙間に給脂

ホイールボルト、ナットのねじ部と、ナットとワッシャーのすき間にエンジンオイルなど指定の潤滑油を薄く塗布し、回転させて油をなじませてください。

いちにち一度は緩みの点検

運行前に特に脱落が多い左後輪を中心に、ボルト、ナットを目で見て手で触って点検します。

「お・と・さ・な・い」を徹底しよう！



Mr. 整備くん

詳しい情報は日本自動車工業会ホームページへ
http://www.jama.or.jp/truck-bus/wheel_fall_off/

国土交通省　自動車点検整備推進協議会　大型車の車輪脱落事故防止対策に係る調査・分析検討会　日本自動車工業会(いすゞ自動車　日野自動車　三菱ふそうトラック・バス　UDトラックス)
全日本トラック協会　日本バス協会　全国自家用自動車協会　日本自動車整備振興会連合会　日本自動車販売協会連合会　全国タイヤ商工協同組合連合会　日本自動車タイヤ協会
全国石油商業組合連合会　日本自動車車体工業会　日本自動車輸入組合 日本自動車機械工具協会　日本自動車機械器具工業会　自動車用品小売業協会　日本自動車車体整備協同組合連合会

jamagazine
Japan Automobile Manufacturers Association
vol.57-58　2023-24

日本自動車工業会「JAMAGAZINE冬号」2023年12月27日発行（季刊発行）
発行人：一般社団法人 日本自動車工業会 総合政策領域

発行所：一般社団法人 日本自動車工業会　〒105-0012 東京都港区芝大門1丁目1番30号　日本自動車会館
自工会インターネットホームページ　https://www.jama.or.jp/